

筆者は7月に米国スタンフォード大学で開催された Summer Symposium on State-of-the-Art-Imaging (SSSAI) に参加した。本研修に参加するにあたり“漠然と”だが今までよりも知見が広がるのではないかと感じていた。そして実際に参加してみると、想像以上に多くのことを学ぶことができた。この報告書ではモズレー先生が講義中に使用した SWOT 分析(意思決定の戦略ツール)を用いて、本研修の目的と筆者の研修を通じて得た知見に関して分析し、考察していくこととする。

1. Strengths:強み

日米の技師の違いを最も感じたのは、職種の細分化である。米国では技師は原則自分の専門のモダリティを担当するのみであるのに対し、日本の技師はマルチモダリティを扱えるという点を比べると非常にユニークな職種であることが研修を通じて実感できた。また、日本の技師は研究へのモチベーションが高く、Ph. D. を取得している者も少なくない。こういった背景も日本の放射線技術が米国にも劣らない高い水準を維持している理由だと筆者は推測する。

2. Weaknesses:弱み

日本の技師はカバーする業務範囲が広く、研究意欲も高い。しかし、言語的な障壁がある故、海外に発表、論文として発信される数は多いとは言えず、まさに弱みである。本研修の位置づけは、こういった状況を変えるための国際的視野を持った人材の育成であると筆者は考える。

3. Opportunity:チャンス

スタンフォード大学では 7T-MRI や Molecular Imaging などの最先端医療を見学・体験することができた。また米国の任意保険制度による高額な放射線画像検査の実情を知り、我々が日本国民全てのための医療を支えているという事実を再認識するきっかけとなった。さらに、モズレー先生の講義で、研究を継続的に発展させるため、SWOT 分析が用いられていた。こういったビジネス的思想を取り入れたレクチャーは、日本では聞けない米国ならではの内容でとても斬新であった。講義の後には、Stanford University Hospital の Radiological Technologist とビールを片手に語らうことができ、仕事の大変さなど話を聞くことができた。こうした体験の中で自国・自施設・自分を見つめ直し、再考する機会こそ本研修の目的、つまり国際的な視野の獲得ではないかと筆者は考える。

4. Threats:脅威

脅威と言うと悪い意味の様に捉えがちだが、逆に考えると課題を乗り越えるための改善の余地が残されているとも捉えられる。JSRT の国際化の過程では、言語の違いを越えて参加しようと賛同していただける方をどれだけ増やせるかが課題である。筆者は1週間の研修を通して、米国をとても身近に感じる事ができた。他のメンバーの方

達もきっと同じ感情を抱いたことであろう。つまり、スタンフォード大学での研修を終えたメンバーが、どれだけ多くの人に国際的視野の重要性を語り、人々を牽引していくかが、今後求められていることなのではないかと筆者は感じる。



筆者がモズレー先生から研修終了証
を受け取った際の様子

最後に、本研修を支えて下さったモズレー先生やスタンフォード大学の先生方、松浦由佳様をはじめとした日本放射線技術学会関係者の皆様、GEHC-J の関係者の方々、ならびにメンバーを引率していただいた北里大学の佐藤英介団長、そして貴重な時間を共有できた仲間に厚く御礼申し上げます。